－所蔵作品紹介－

木原　康行　KIHARA Yasuyuki

Concentration

Concentration

作品データはこちら　《Concentration３》
《Concentration７》

木原康行はパリ在住で、国際的に活躍する銅版画家です。主にエングレーヴィング（engraving）による作品をこれまで手がけてきました。エングレーヴィングとは銅板に刀（ビュラン=burin）で直接彫り込んで版を作る技法をいいます。刀と銅板の抵抗が強いため、他の銅版にくらべて高度な集中力と精神力を必要とするといわれています。加えて一点の作品を完成させるのに平均二か月もかかり、気力と持続力も同時に要求される技法といえます。

作者は1932年（昭和７年）、名寄市生まれ。武蔵野美術大学洋画科を卒業しましたが、そのころから病気のため、聴覚を失いました。1970年に渡仏、版画塾として国際的に有名なヘイターのアトリエ17で銅版画を学びます。その後ブラッドフォード国際版画ビエンナーレ展（ポーランド）、20世紀の版画展（パリ）、サングラバド版画展（マドリード）などに出品するなど、欧米では長いキャリアを積んでいます。また、日本でも東京、大阪、札幌など全国で個展を重ねています。

作品は「Concentration（集中）」と題された10点シリーズのうちの二点。一版多色の技法により、銀色の地に黒い線がほどこされています。（このほか同じ構図で、紺色の地に金色の線がほどこされているものもあります。）いずれもミクロの世界、あるいはマンダラを思わせるような精密な画面が目をひきます。タイトルどおり、同心円状の形態が幾重にも重なり、画面中央に”集中”していますが、それはむしろ結果であり、神経細胞のような線の束が収束し、からみあいながら増殖して円を作り、さらにその円も増殖をくりかえす―と考えた方が良いでしょう。

事実、作者はあらかじめ構図などを考えずにじかに銅板にむかって線を刻み、それを増殖させてゆくといいます。作品からは一程の深遠な無限感といったものが感じられますが、それはこの制作方法と決して無縁ではありません。いわば線を根気よく刻んでゆくという行為によってこの版画が生まれたといえますが、「Concentration（集中）」とはこうした版製作の態度の謂でもあるのでしょう。

旭川美術館だより「氷華」No.９（1985.７発行）「収蔵作品から」より